

京に実在するのかと疑う人も少なくないでしょう。しかし、現実にあるのです。これは、多摩川の中流、調布市の多摩川の川原での昭和四十八年一月のできごとです。

世界一の過密都市東京にとって、多摩川の川原は、都民に残された唯一のオアシスとなっていました。この多摩川の自然を守らなくて、ほかに何を守るといふのでしょうか。昨秋に制定された「東京における自然の保護と回復に関する条例」も、私たちは、まさに多摩川の自然を守るためにつくられたのだと考えています……。等、多摩川を守ろうとしている人間にとって、何よりも当りまえの論理なのですが、これが世の中には通用しないのです。どうしてそんなことがと驚いていても仕方がないので、私たちは、これまでに大いに怒り、訴え続けてきました。

訴えた相手は「私もそう思う」と甘い言葉を返してくれたこともありましたが、それでも私たちの希望はほとんどかなえられずに三年が経過しています。

◇ 会の目的

私たちの希望……昭和四十五年二月、多摩川の自然

を守る会結成以来、繰り返し、訴え続けてきた「私たち

の希望」とは、あきれるほど簡単なことなのです。つまり、多摩川の自然保護、わかりやすくいえば「多摩川に何もつくりないうください」「多摩川を今のままで残しておいてください」ということなのです。残すには残すための計画を立案し、実施しなければならぬと政治家や役人はいかも知れません。否、もうすでに何回もそう言っています。しかし、「何をつくらないうください」という希望の方が容れられて、「何もつくりないうください」という希望が一向に容れられず、いたずらに時間かせぎをされているように感じるのは、私たちのヒガミでしょうか。といってもすまされないので日本の現状です。何もつくりないうでもらうこと。多摩川の土手のすぐそばを走る自動車道路、土手の上につかか、よい赤土の散歩道兼自転車道があるのに、わざわざつくれるアスファルト。サイクリング・コース。川原には折角、自然にできた起伏や、昔からの雑草の草むらがあるというのに、ブルドーザーを入れて、平坦にされ、芝が植えられ赤や黄のベンチを置いてつくれる人工公園や運動場。